京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十四卷　第三號

大正十一年三月一日發行

論叢

最低生活費課稅說を駁す・・・・・・法學博士　小川鄉太郎

マルクス氏餘剩價値說の評論・・・・法學博士　田島錦治

戰國の都市・・・・・・・・・文學博士　三浦周行

小作制と小作法・・・・・・・法學博士　河田嗣郎

我國に於ける國民所得の發達・・・法學士　汐見三郎

經濟道と經濟術・・・・・・・法學士　作田莊一

時論

我邦の相續稅を論ず・・・・・・法學博士　神戸正雄

說苑

地學觀社會學說に就きて・・・・法學博士　財部靜治

リッケルトの價値體系・・・・・文學博士　米田庄太郎

雜錄

エルンスト、フリードリッヒの經濟階段說・・・・・經濟學士　黑正巖

雜錄

エルンスト、フリードリッヒの經濟階段說

黑　正　巖

エルンスト、フリードリッヒはその著經濟地理學の總論に於て一の經濟階段說を樹立した。[1] 氏は經濟階段を歷史的に考ふると同時に、現今世界に分布せる各民族の經濟發達の程度を明にし、經濟階段の地理的考察を試み、以てその分布狀態を論述した。而て氏は特に後の點を本說の主眼とし卷末にはその分布地圖をも揭げた。其の說く所、從來の諸階段說と大に趣を異にするものがあるので、茲にその梗概を紹介することにした。

一　本說の出發點

氏は經濟階段を劃定するに先ちその出發點を明かにして居る、[2] 先づこの點から記して見よう。

人文　理學（Anthropogeographie）は自然と人類との關係よりして人類並にその狀態の分布を究明するものである。而て自然と人類とは相關々係に在つて、自然は人類に影響を及ぼすと共に人類の加ふる影響に抵抗し、又人類は自然の影響に對抗して自然に影響を加へる。故に人文地理學の一分科たる經濟地理學は人類の側より、殊に其の欲望充足の方面から自然と人類との相關々係を根本的に研究するの任務を有す。而て自然と人類とは等しく經濟地理學の對象ではあるが、前者は靜にして後者は動である。恰も彫刻家と大理石との關係であるから經濟生活の主體は人類である。經濟とは人類の欲望に對する物質的充足方便の供給、使用、保持を不斷に行はんとする人類の種々なる經理の總稱にして換言すれば人類が自然に對し、ある目的（欲望充足）のために加ふる影響である。從て自然に加ふる影響によつて何物が生れ出るかは第一に人により、次に自然による。一定の時、一定の場所に於ける經濟狀態は人の自然に對する勞働遂行と自然の抵抗の如何によつて異る。動植物はその生活必要により、又鑛物はその出

1) Ernst Friedrich; allgemeine u. spezielle Wirtschaftsgeographie, 1907. Leipzig
2) S. 12～16

現の如何により著しく場所的に拘束限定されて居るけれども、人類の生産にかゝるものゝ數量並に質は人類の堪能に支配せらるゝこと甚大にして且つ高度の文化人は動植物の移植即ち目的を意識しつゝ培養法を行ふことによつて改良を計り、又交易殊に世界貿易によつて特定の場所的並に物質的拘束を脱してその欲望を充足する。乍併低度の經濟階段にあるものは純然たる採集經濟(Sammelwirtschaft)を營む人類の團聚にして、その欲望充足につき自然に依屬することの大なる點は動物と異る所少ない。即ち人類の數、出現の場所、欲望充足の形式及びその時季は該地域の强制又は自然の天與によつて支配せらる。

人類以外の動物はその欲望充足のため、自然の與ふる材料を蒐集し從て始と全く自然の强制に服從して居る。彼等が自然の强制に抵抗し之が影響を減少せしむる唯一の方法は肉體的適應である。即ち肉體的走翹機關の發達により場所的、數量的困難に打ちかちて欲望を充たし、冬季窮乏の時に對しては體内に脂肪層を生じ、或は皮毛の發達によつて寒冬に耐へうるようになる。又動物によつては右の目的のため體外的處理をするものもあつてその目的を到達せんとして動植物を培植馴致することさへある。然らば動物と人類との差異は何れの點にあるかといふに、人類は自然の强制を脱却するために自然に對し肉體的適應をなすの外に體外的反動をなすこと之である。即ちこの反動は體外的器具道具の獲得創造となつて現はる、之を經濟と稱す。最低度の人類は多く肉體的適應例へば感覺の鋭敏、快速の足、樹に攀ぢ上る能力等によつて自然に對抗して居るが、然かも已に體外的道具を以て自己を支持し、或程度に自然の强制を脱して欲望を充足しつゝある。經濟上の進步發達は凡べて體外的反動手段の發展によつて自然の强制より欲望の充足を脱却せしむることを目的とし その發展につれて肉體的反動は益々後退する。

右の如く自然の强制と之に對する人類の反動とは相互作用をなす所の二個の力であると考へ

ることが出來る。この二者を二つの平衡線（Gleichwichtslinie）と假定せんか、若し人類が微力である場合には自然の强制力を示す線は人類に近く横はり、强力ならは全く彼を離れる。人類が經濟生活を營むに方つてはその材料は之を自然より取り來らねばならぬのであつて、彼が自然に對して有する闘爭力は只その經濟の結果によつて計量しうるものである。經濟地理學の最も重要なる主題は經濟を營む人類の力の强さを標準として之か區分を設くること即ち經濟階段を劃立することによつて、複雜錯綜せる經濟狀態を達觀すること之である。そこで經濟階段の區分の準則としては之を抽象的にいへば、一の經濟團聚（Wirtschaftsgruppe）が進み來つた所の欲望充足と自然の强制との間に存する距離を採用せねばならぬ。即ち具體的にいへは、道具の進化を以て準則とし之によつて右の距離を決定することが出來る。

然らは人類は自然の强制と欲望充足との距離を如何にして進み行くものであらうか。人類は自然に對する經驗を心の中に蓄積し、以て自然との闘爭に際して之を利用し、或は體肉的幷に體外的道具に變改することによつてその目達を到達す、從て自然の强制よりの距離の大小は經驗蓄積（Erfahrungsgefässe）が完全なりや否やによる。故に若し心の發展（Entwickelung der Psyche）即經驗の集積（Erfahrungsinvestation）―この經驗蓄積の各部が經濟目的のために道具といふ財貨の出現を可能ならしむ―といふことから出發して行くならば、最低の經濟階段から最高の經濟階段に到達する時間的經濟發展を論理に劃しうると共に、又經濟階段の場所的分布をも合理的に定めらることは疑のない所である。經驗蓄積と道具とは本質的に相互依存の關係に在つて、一定の道具の出現は一定の經驗蓄積の程度によつて決定せらる、故に心理的觀點より出發して劃立せられた階段は經濟的にも亦勿論是認せられねばならぬ。

二　本說の要旨

イ　經濟階段の歷史的考案

フリードリッヒ氏は右の觀點に立つて次の四階段を劃定した。[3]

第一期、反射經濟の階段（die Wirtschaftsstufe des Reflexes od. tierischen Wirtschaft, der Sammelwirtschaft）最低度の經驗蓄積は反射作用にして、動物の適應行動に於て最重要の地位を占むる。低度の人類の活動にもこの反射作用が重大の勢力を有し、道具の發明幷に利用の最初の階段に於ては之が主役を演ずる。反射經濟の階段では、肉體的適應が「經濟」よりも著しく優勢であるから、或は之を動物的經濟階段といひ或は採集經濟階段といふても可い。何となれば採集では主に採集經濟が欲望の充足を確保し、初めて固有の經濟卽ち自然の强制から脫却して欲望充足のために、自然に影響を加ふるに至るからである。併しこの階段に屬する人類の欲望充足は殆ど全く自然の强制に支配され、主として肉體的適應に由て之に對抗し體外的反動の見るべきものが少い。反射も本能と同じく人類が肉體的に蓄積した經驗財貨であるからその持主と共に滅失し、從て人類に對する效果は動物に於けると同じく、肉體的適應幷に體外的反動たる道具の創造に關しても滅失してしまふ。

第二期、本能經濟の階段（die des Instinktes, od. der instinktiven Wirtschaft）この階段に於ては本能の助に由て體外的道具の創造に必要なる經驗を蓄積し、自然の强制より脫して欲望を充足するに至る。卽ち植物採集より植物栽培へと移り、狩獵より馴養へ推移して行く。欲望の充足は場所、時、量、質につきて不完全ながらも前代に比し遙かに自由である。併しこの階段に於ても、經濟の進步に必要な經驗蓄積たる本能がその持主の死と共に滅失し、又什器武器家畜或は家の附屬物等は、その持主に肉體的に附屬して居るものの如く考へ、その死と共に墓場に埋めらるゝから經濟蓄積の具體的表現たる道具の貯積を增加すること極めて少い。

第三期、傳統經濟の階段（die des Herkommens, od. der traditionellen W.）人類が道具を後世に傳ふる樣になるには完全な體外的經驗蓄積が

3) S. S. 17ff. 19.

構成せられねばならぬ。傳統（Tradition, Überlieferung, Herkommen）とは人類が經驗を集積するための一の仕組であつて、自然の强制に對する經驗の保持、蓄積、並に之を後代へ遺し傳ふることを確保し、軈ては已び行く人々の外部に經驗を集積し所謂「傳來」（Herkommen）の經驗を增加す。經驗蓄積を後代へ遺し傳ふる事は模範言語形象記錄等に由て漸次完全に行はれ、殊に後の三者が經驗の傳統化に最役立つ。この階段では前時代よりも完全なる經驗蓄積に由て場所時量質につき著しく自然の强制を脫して欲望を充足することが出來る。換言せば以前の何れの時代よりも更に多く、人類の場所的分布、人口の時間的不變、平均年齡、人口密度並に生活幸福增進の施設等を發展せしむることが出來る。

第四期、科學經濟の階段（die der Wissenschaft, od. der Wissenschaftlichen W.）傳統が益々蓄積構成せられて行けば最完全な經驗蓄積たる科學及技術となる。この階段では自然に對する凡べての經驗が、合理的に目的を意識しつゝ蓄積せられ整理せらるゝと共に、この經驗蓄積の內に、將來自然の强制との鬪爭から生れ出る所の知識が既に胚胎して居る。科學は凡べての自然現象（外的並に人的）――その中には差し當り人類の欲望充足に關係のないようなものもあるが――を詳密に研究し、技術はその科學の知識を自然と鬪爭する爲に有形の道具に變改する。故に科學經濟階段は之を合理的意識の經濟階段とも稱すべく、漸次科學の知識並に技術の作り出した道具に由て、一種の確實性と目的達成欲とを以て自然の强制に對抗する。實に經驗集積の目的は自然の狀態及人類の狀態を徹底的に研究し且つ深刻に認識し、以て欲望充足のため意識しつゝ自然狀態を支配しようとするに在る。[4]

四　經濟階段の地理的考察

フ氏は上述の如く經濟階段を抽象的且つ時間的に考察して區劃を試みたが更に現世界に存する各民族の經濟狀態を具體的に觀察し、之を各階段に當てはめ以てその地理的分布を劃定する

4) S. S. 19—37

ことに努めた。[5] 氏は先づ各階段に於ける經濟狀態人口政治等を述べ、その各々の最代表的な民族につき詳細な例證を示し、各階段に於ける自然の强制と欲望充足との關係を比較研究するに便ならしめた。各民族の經濟狀態並に如何なる民族が夫々四階段に屬するかに就いては煩雜であるから省略する。大體に於て經濟階段の地理的分布は氣候帶(Klimazonen)と一致して居る事が分る。卽ち科學經濟階段に屬する人民は主として温帶に居住し精々亞熱帶を出でぬ。亞熱帶は傳統經濟階段の存する所にして、高熱濕潤の熱帶及び天惠少き極地は本能經濟を營む人類の住居である。反射經濟階段は熱帶亞熱帶の荒地、熱帶の原始林、極地に存する事を發見する。[6]

尙ほ氏は一定の地帶又は地域の價値評定は、人類の經驗蓄積の多少に從て差異を生ずることを述べ、高度の經濟は低度の階段に向つてその勢力を波及し次第に經濟發達の程度が世界的に平均せんとするの傾あることをも說いた。[7] 更に經濟方向(Wirtschaftsrichtungen)、經濟形態(Wirtschaftsformen)經濟地帶(Wirtschaftszonen)に由て地表を區劃し、その經濟階段との關係を論じ、以て各地域が夫々特異の經濟狀態を呈する所以を明にしようとした。[8] 從てフ氏の經濟階段を全體に亘つてその眞意を解せんとならば之等の諸研究をも叙述するの必要があるけれども之は他日に讓る。

三　餘　論

從來種々の觀點から多くの經濟階段說が唱へられたが、之等は階段區劃の標準として一二の外形的事實を採るに止り、經濟發達の眞髓を、特定の心理的事實或は勢力の發展に還元して根本的に理解せしむる所が少かつた。ビュッヒャーやゾムバルトの如きも暗暗裡に心理的研究に意を用ひて居たが、ラムプレヒトが經濟階段の「心理化」を高調して以來、この傾向が顯著となつて來た。[9] フ氏の說もこの趣意に出たのであらう。

生產要素を標準としたロッシャーの階段說には第一期を「自然が生產上に勢力を振ふ時代」と

5) 最近經濟地理學は一定の標準に由て地域の區分をなし、その各部分に於ける經濟現象の異同を明にし、その間に存する因果的法則を發見しようとするの傾向を生して來た。Robert Sieger; die Wirtschaftsgeographische Eientilung der Erde, K. Andrees Geographie des Welthandels BdIV. S. 3以下參照
6) S. 37　7) SS. 40－41　8) S3. 47 ff.
9) 米田博士　經濟心理の研究　p. 125 以下參照

して居るが、之は單に生產のみを觀察したもので經濟生活の全般に亘り自然と人類との關係を心理的に考察したものではない。又バッテンやギッヂング等は心理的研究をなし、殊にギ氏は知力生活の方面から有機的經濟、本能的經濟、理性的經濟の三者に分ちフ氏の說と極めて類似して居る。併しフ氏は、徹頭徹尾自然と人類とを對立せしめ、人類の自然に對する經驗蓄積の變遷に由て二者の結合の形態又は樣式の變化すべきを說き、之を標準として地理的考察を試みた點に於て、假しギ氏の影響があつたにしろ、フ氏の功績を認めてよい。又 Vierkandt 氏は自然民族、文化民族の區別を樹て更に之を細分してその地理的分布を研究して居るがフ氏の如く決定的でなく明瞭を缺いである。[10] 從てフ氏の階段說の萌芽は既に以前にあつたのであるが、之を大成したる點に於てビュッヒャーがシエンベルヒの經濟階段說を大成したと同一の地位を認めてよからう。

只茲に注意すべきは歷史的經濟階段を無條件に平面的地理的研究に援用しうるや否やの問題之である。例へば同じ傳統經濟といふも、科學經濟の存しなかつた時代のそれと現代のそれとの間には、單に外形的のみならず心理的に著しい差異は無いか否かを檢するの必要がある。而も心理的考察に重きを置いてゐるフ氏にして、一言茲に論及する所無きは、遺憾である。又フ氏の定義する「經濟」の概念は多少明確を缺ぎ時に由てその言ひ表し方も違ひ、今日一般に認用せらるる所と異つて居るかに思はるる。その反射經濟、本能經濟と云ふが如きは果して近世經濟學の範圍內に於て取扱はるべきものか否かは疑問である。[11] 之等は寧ろ「經濟前史」に屬せしめ經濟史の埒外におくを至當の樣に思ふ。

（大正一一、二、一九）

10) Robert Siager; a. a. O. SS. 98, 102
11) 米田博士、前揭、p. 210 參照
12) 河上博士、人類原始の生活 p. 15 以下參照